

地域研究 Australia

——学術的接近方法（入力）とその教育内容（出力）——

高 橋 一 郎

Area Studies of Australia

—Approaching and Teaching Method—

Ichiroh TAKAHASHI

はじめに

研究分野として地域研究は、第二次大戦後のアメリカを発祥の地としてその後、一つの学問領域として発展している。研究対象地域の歴史、政治、経済、産業、文化等、幅広く、学問分野をまたいで複合的にその対象地域を掘り下げるのが地域研究である。筆者はオーストラリア研究に多くの時間を割いてきた。そしてそれらを授業及び留学指導に出力（活用）する形で教育分野への還元を行ってきたものである。本稿では、この地域研究の学術的な位置づけを改めて確認してみること、そしてオーストラリアというオセアニアに位置する大国を対象とした地域研究における特殊性や留意点を明らかにすることにした。そしてそれらの内容を大学の「地域研究」という授業において、それまで得たものをどのように学生に教育として伝えていくのか、その内容はどうあるべきか、についても論じる。現在日本の高等教育部門において、オーストラリア全般を専門に扱った講義科目類をほとんど見ない。あっても多文化共生、先住民、等個別の学問分野に関してオーストラリアがその分析に適用されているという趣旨のものが多く、オーストラリア全体をその国の内外の状況を総合的に学ぶ内容の授業科目は散見されない⁽¹⁾。本稿で筆者なりの組み立てと実践してきたものを公開することで、大学・高校の教育現場で、オーストラリア関連の授業（地域研究）の裾野がより広がるきっかけとなることを期待するものである。地域研究という学際的な学問と、その教育を語るため、[研究]という学術的アプローチと、[教育]という現場での教育実践という異なった項目が同居する内容の論文となることを予め表記しておく。

第1章 地域研究とは

第1項 地域研究と接近方法

地域研究における対象地域への接近方法は、まず対象的方法と方法論的方法の二つが試みら

れた⁽²⁾。対象的方法とは、対象地域の歴史、政治、経済、法制、思想等の文化領域の中から一つを選びその対象領域を解明しようとする方法である。これは一つの分野が深く掘り下げられる反面、その他の領域との関係性が重視されないところに限界があると言われた。一方、方法論的方法では、自己の作業仮説⁽³⁾を様々な分野で検証することで研究調査対象を多くの異なった角度から接近ができ、その意味では対象的方法における一つの分野を深く掘り下げるのとは異なり、それぞれの学問分野の相互作用を含めて複眼的に対象地域に接近が可能となりうるものである。これが今日言われるところの【学際的研究＝interdisciplinary studies】につながっていると見える。ただし、ここにも限界があることも指摘されている。すなわち、検証作業における原点となっている仮説が西洋文化を起点としているため、方法論的方法では、例えば対象研究地域を東南アジアとしたら、東南アジアと西洋との違いは示すことができて、東南アジア社会自体の解明には至らないのではないか、という指摘である⁽⁴⁾。こうしたことから文化人類学系などで主にみられる経験主義に基づく心情的方法が論じられた。これは西洋社会的な合理的な科学的認識よりも非合理的な直感的認識を重視したものである。草の根レベルの調査手法は、より現場に即した地域像が描けるが、反面、例えば、社会（政治・経済等）⁽⁵⁾に対する現実的な要請に対応できないという側面もある。こうしたことから、学問分野のみならず、対象地域へのアプローチ（接近方法）においても、相互乗り入れ的な学際的方法である〔総合的方法〕が求められることとなる。網の目のように縦軸（学問分野）と横軸（接近方法）が織り交ぜられながら進めていく、これが地域研究という研究分野の進め方であり、そこには引き続きそれぞれの分野と手法によるせめぎ合いと試行錯誤が断続的に行われていくものであろうと筆者は考える⁽⁶⁾。

第2項 オーストラリア史研究の課題と考察点

2-1 日本の教科書における小さな扱い

筆者は長年、オーストラリア、ニュージーランドといったオセアニア地域を中心に地域研究の学術部門に関わってきた。主に、歴史、政治、文化を中心に様々な事象を掘り起こしそれを小論文等で重ねて発表することにより、まだ不十分なこの地域のわが国における研究課題を提言する意味合いがあった。筆者が以前、高校の世界史の全教科書を調べたところ、オーストラリア・ニュージーランドなどこの地域に関する記述は平均1頁余であった。中には全く触れていない教科書もあった。あるいは、移民開拓の観点から、地理的地域性を無視してカナダとオーストラリアを同等に並べて紹介している教科書もあった⁽⁷⁾。いかにオセアニア地域が世界史における辺境であるかを実感する機会となった。そこには、「歴史の短いオーストラリア」という現実と印象が、その取り扱いにあたり重要度が低いという扱いになっていることが容易に想像できた。しかし冷静に考えてみると、いわゆるオーストラリア史と言われるものは、アメリカ史と年数的にそれほど大きな差があるものではない。しかしその扱いが大きく異なる事は、改めて「オーストラリア史とは？」とオーストラリア地域研究の中の重要な一分野である歴史的な観点に対する重要な問いがあり、その問いも答えも明確になっていない状況が現在も

あることにまず目を向ける必要があろう。

2-2 「オーストラリア史」は膨らむ可能性はあるのか？

歴史には、①先史（歴史以前）、と②歴史の二点があるという。その分岐点として、社会的な統治がなされていて、その社会運営の過程と進歩が記録されている時代を扱うことが「歴史」であり、そうしたものに当てはまらない段階のことを「歴史以前」と位置づけられている⁽⁸⁾。学術分野的には①考古学と②歴史学に分けられている。

オーストラリアは約5万年前にニューギニア島及び東南アジアから先住民がやって来てオーストラリア大陸に住み着いたと言われている⁽⁹⁾。それがアボリジニー及びトレス海峡先住民、である。これら先住民はオーストラリア大陸にやってきて、約1万年かけてオーストラリア大陸全土に分散した。そして230余年前にイギリス囚人を乗せた船が入植した日（1788年1月26日）を記念して1月26日を「Australia Day」とした記念日とされている。そして今日、いわゆる「オーストラリア史」というものはこの入植以前にオーストラリア大陸にイギリス国旗を立てて領土の領有を宣言したジェームズ・クック（1770年4月29日上陸）の動向から始まっている。

それでは先住民上陸からクック上陸までの約47,500年の年月はオーストラリアにとって何なのであろうか？ オーストラリア史とは約250年を扱ったもので成立するものなのであろうか？ その可否は、当然のことながら、クック上陸以前のオーストラリア大陸の状況によって大きく異なってくる。

先住民アボリジニーの間では、その広大な大陸規模から、領土を巡る部族間の争いはほとんどなかったとされている⁽¹⁰⁾。それぞれの部族が大陸全土に分散して、ある部族は定住、ある部族は広大な地域内での移動生活をしていたことが文化人類学から明らかにされている。しかしアボリジニーは文字を持たなかったため、その記録は住居跡に残る壁画に限定されていて、イギリスの入植以前の詳細な記録は残っていない。

歴史と歴史以前を分ける分水嶺は、社会的な統治がなされてその記録が残っているか否かであることを上述した。アボリジニーもイギリスが入植した17世紀になると、それぞれの部族がそれぞれ独自の統治機能を有していたと考えられる。しかしそれを記したものが残っていない。また各地域に分散した先住民は、大陸全土を統括するような組織的な体系を持っていなかった。それでも各々が各地域で独自の統治をしていたとしたら、そこには「歴史」として位置づけるに値する社会組織があったことも考えられる。従って、そこに、仮説としてイギリス入植前の100年に限定すれば、まだ見つかっていない「オーストラリア史」となりうる空白なものがあるかもしれないという論理が成り立つ可能性も残っている。歴史家は西洋文化到着以前のオーストラリア大陸に「歴史が存在した可能性」を探究しているのであろうか？ その探究こそ、考古学、文化人類学といった現場主義の学問と歴史学という資料を中心とした学問の学際的交流が必然となり、そこから新たな発見が立証される可能性がある。先住民アボリジニーに関しては、「ドリームタイム」をはじめ、その世界観を文化人類学の視点から幾多の分析がな

されている。しかしその5万年というオーストラリア大陸到着後の時間軸を分割して研究する動きにはまだ至っていない。それは文化人類学が文化的に異なる世界観や習慣などの分析を中心とした学問であるため、時間軸で分割しての研究には至っていないと思われる。それに加えて資料の欠如が合い重なり、ここには学際的接近は活発ではない現状がある。しかしそれは逆に、今後その分野で掘り起こす事象がいくつも埋まっていることも意味するものと言える。

オーストラリアでは、現在に至るも、「イギリスのオーストラリア大陸入植を流刑囚によるオーストラリア開拓」とした第一理由を巡り論争があり一致した結論は出ていない⁽¹¹⁾。そうした中で、歴史を遡り、歴史の枠を拡げる動きには至っていない。しかし歴史以前と歴史の境界線が引かれた年代が比較的日の浅い地域では、今後その境界線が移動する可能性は皆無ではなく、オーストラリア史はその可能性を残したものであることを本項のまとめとして強調しておきたい。

現在

先史（約4万9千年余）

←→ 歴史（230年余）

先住民上陸→氷河期終わり独立大陸に→大陸内分散	入植→植民地建設→連邦国家
先史（約4万9千年余） ←	→歴史（230年余）

↑
大陸上陸及び領有宣言（1770）

今後の可能性

→歴史の拡がる可能性も

先住民上陸→氷河期終わり独立大陸に→大陸内分散	イギリス人大陸 上陸前の新たな 事実の発掘(先住 民もしくは他国)	入植→植民地建設→連邦国家
-------------------------	--	---------------

↑
大陸上陸及び領有宣言（1770）

2-3 過小表記のオーストラリア入植周辺期

前項でオーストラリア史における先住民社会の発展に、[オーストラリア史]として今後発展（提示・表記）されるべき内容がある可能性について言及した。本項ではイギリスのオーストラリア大陸入植とその前段階周辺の歴史的記述の少なさについて取り上げる。

イギリスのオーストラリア大陸への入植を巡る第一動機は何であったか、については①流刑

説、②商業説（ダラス説⁽¹²⁾）、③戦略物資説（フロスト説⁽¹³⁾）の三点が論じられている。いずれも遠方の地オーストラリアへの入植の動機となる理由であったが、その中で、何が第一動機か、となると学者の意見は割れている⁽¹⁴⁾。

こうした複数の見方はそのままオーストラリアの歴史教科書に反映している。オーストラリアの小学校で使われている、*The Story of Australia—An Illustrated History for Young Australians* にはこれらの諸説が個別に紹介されている⁽¹⁵⁾。ところがそもそもなぜイギリスが海外に流刑先を求めることになったかについての原因についての記述は全200頁の同書で、わずか5行の言及に過ぎない。

In 1776 the Americans fought a war with the British and won their freedom to govern themselves. Britain no longer had a place to send convicts. Until a place could be found to send them they were confined in the hulks of old ships on the River Thames.⁽¹⁶⁾

（1776年、アメリカがイギリスと闘い自由と自治権を獲得した。これによりイギリスはそれ以降アメリカに囚人を送ることができなくなった。新たな送り先を見つけるまで、囚人はテムズ川上に停泊する船に閉じ込められていた）

アメリカ独立戦争（1775-1783）は、アメリカでは「アメリカ独立革命」と称していて、独立宣言を経て今日のアメリカ合衆国が成立した、歴史的に重要な出来事である事は言うまでもない。しかしこの歴史的イベントの主は独立戦争そのものの過程とアメリカが独立を勝ち得る過程に細かな描写と共に多くの当時の記録が残されている。なぜならこれは「アメリカ合衆国成立」における不可欠な歴史的表記だからである。

それでは戦争に敗れたイギリス側から見ればどのようなようになるであろうか？ 上述の通り、敗戦により、それまで囚人を送っていた相手先へのルートが閉ざされ、それが巡り巡ってオーストラリア大陸への入植という政策へイギリス内務省が舵を切った原因となった。ここに、自由を勝ち取り独立を果たしたアメリカと、戦争に敗れて不要な囚人の捌け口としての送り先になったオーストラリア、という戦争における勝者と敗者が微妙に絡み合っている歴史のダイナミズムをオーストラリアの歴史教科書や歴史書は極めて扱いが小さい。そこには、そもそも歴史とは「勝者の歴史であり、勝者が歴史を書く」とした根底と、客観性を求めることの難しさがオーストラリア史において、入植原因となったアメリカ独立戦争を大きく扱わないことによって示されていると言える。

本項では、アメリカ独立戦争はアメリカ合衆国の原点となる歴史の転換点であると同時に、同じくイギリスの植民地政策の転換点でもあり、また同時にオーストラリア大陸入植さらにはオーストラリア大陸における西洋社会の開始につながった、という大きな転換点であったことを記しておきたい。

2-4 どこまでがオーストラリア史か？

オーストラリアが独立国としていつ成立したかについては議論が分かれる。一般的には連邦制度が始まり、連邦議会、連邦憲法が発足した1901年1月1日とするものが多いが、これとて、外交権や独自の国歌を持っておらず、それをもってして国として独立したかについての論議は絶えることはない。この議論が沸騰したのは1975年、時に総督（女王代理）が王権を駆使して時の首相を解任した時である。曰くイギリスの王権がオーストラリア政治に関わること自体、オーストラリアはまだ独立を果たしていないのではないか云々、の論議となった。なお、当時の関係者が亡くなったことにより、2020年は当時の知られていない事実が書面と共にいくつか明らかになった年であった⁽¹⁷⁾。

アボリジニー前史時代、アメリカ独立戦争、イギリスの王権介入で論議となったオーストラリアの独立国家設立時期、などオーストラリア史を扱うとき、「どこからがオーストラリア史か？」という問いに常にぶつかる。すなわち、植民地として出発した西洋の「オーストラリア社会」は、誰にも占有されていない地において国旗を立てたものの国の領土となる、とした海洋時代に成立したルールを前提に始まった社会であり、そこには先住民は「存在」していない。先住民との出逢いから連邦国家が成立した後も含め190年余に渡り人間扱いをしていなかった⁽¹⁸⁾アボリジニーの立ち位置をオーストラリア史においてどのように組み込むのか、オーストラリアの歴史家はまだ模索の段階であると言える⁽¹⁹⁾。この模索の段階においては、歴史の修正、書き換えも時に応じて必要となってくる。その顕著な例が1992年のマボ判決である。これは上記、イギリスがオーストラリア大陸を占有する根拠となった「誰にも占有されていない土地」とい無地主（テラ・ヌリウス⁽²⁰⁾）の考えを根本から否定するものであった。

歴史とは本来、歴史家によって「確定された過去」であるべきものである。しかし歴史の浅いオーストラリアにおいては、過去の内容、価値観が大きく揺さぶられており、今後の展開ではマボ判決同様、現在示されている歴史が修正を迫られる事態になる可能性もあることを頭に入れておく必要がある。多様な価値観の下、何を基準にどのように客観的に物事を見つめるのか、という地域研究本来の根本的問題を、文化多元主義に転じたオーストラリア社会は常に含んでいることを指摘しておきたい。今後オーストラリア史は、既存の概念の転換が史実の発掘によって起こりうると共に、従来先史扱いだった時代、及びアメリカ史、イギリス史に組み込まれていた事象が、オーストラリア史としての検証を受ける可能性があるものと筆者は考えている。

第3章 オーストラリア学を教える ― 地域研究の観点から

大学の教員として自らの研究分野を深めると共に、それらから得たものを教育という名の下で学生に「還元」するのも教員としての役割である。筆者は最初に大学の授業として担当したオーストラリア事情の授業⁽²¹⁾から20年余、その授業内容と授業展開のあり方を、教育の観点から試行錯誤を繰り返してきた。本章では、オーストラリアの国事情を学際的観点からいくつ

かの学問分野をどのように混ぜながら地域研究としてオーストラリア事情を理解する科目を運営してきたかをまとめる。

第1項 学術分野の選択

ある特定の地域（国）についての授業は、学生の予備知識の有無がその内容と方針を決定する上で一つの鍵となる。筆者の専門地域であるオセアニア地域、特にオーストラリア、ニュージーランドといった筆者の所属大学がメインで留学に送る国に関して、それまでの高校での世界史教科書ではほとんど扱われていないことは既に述べた。従って、今一度ゼロから、すなわち予備知識が無いものとして授業の構成を組み立てた。『地域研究』という授業名に照らし合わせ、あえて、教えるトピックを選抜して置くのではなく、まず学際的観点から、様々な学問分野を網羅してその中からオーストラリア学の地域研究として適したトピックを挙げる、という通常の授業構成準備とは逆の方法で教える内容をピックアップしていった（順不同）。その結果、15回の講義回数に合わせて15の学術分野を選抜した。なお講義回数にトピックを合わせたのみで、各トピックを1回ずつ個別に授業を行うものではない⁽²²⁾。

- ①地理学 ②考古学 ③文化人類学 ④歴史学 ⑤社会学 ⑥法学 ⑦経済学 ⑧政治学
⑨文学 ⑩動物学 ⑪比較文化研究 ⑫憲法学 ⑬倫理学 ⑭国際関係学 ⑮移民研究

これらの学術分野を学際的な接近を試みる地域研究にて、その教育部門においても適応すべく、上の選抜を基に講義内容の骨格を作る作業を組み立てていく。

第2項 授業内容候補の羅列

前項の学術分野に基づいて、関連する講義内容を、15回という講義回数にとらわれずに、まず思いつくままに羅列することにした。

- ・オーストラリア大陸の形成（地理学）
- ・先住民アボリジニー（文化人類学）
- ・イギリスのオーストラリア入植（歴史学・経済学）
 - なぜオーストラリア（という地域・場所）に入植したか？
 - なぜ1788年なのか？
 - なぜ流刑による入植だったのか？
- ・テラヌリウスとイギリス入植（法学・歴史学）
- ・流刑植民地はどのように進んでいったか？ エマンシピストという新たな社会階層（社会学）
- ・ニュージーランド概説① — オーストラリアと入植形態の違い（歴史学・比較文化）
- ・ニュージーランド概説② — 豪とNZ、先住民のステータスの違い（歴史学・比較文化）
- ・ゴールドラッシュとユーレカ砦事件（歴史学・政治学）
- ・ヘンリー・ローソンを読む（文学）

- ・ オーストラリアと自然（動物学）
- ・ Ned KELLY を考える ― オーストラリアのヒーローか、盗賊か？（歴史学・社会学）
- ・ オーストラリア連邦結成～なぜ連邦が必要だったのか？（政治学）
- ・ オーストラリアと日本人移民～ブルームの栄枯（移民史）
- ・ オーストラリア連邦憲法（憲法学）
- ・ 白豪主義 ― 肌の色によって差別されるということを考える（歴史学・政治学・倫理学）
- ・ アボリジニー政策の3変化 ― マボ判決とアボリジニーの土地所有権問題（法学）
- ・ 「盗まれた世代」とは（歴史学）
- ・ オーストラリアと二つの世界大戦（国際関係学）
- ・ 日本人兵士とカウラ事件（日豪関係史）
- ・ 20世紀、南半球2回のオリンピックはオーストラリアにて（歴史学・社会学・スポーツ）
- ・ 多文化主義への大転換と複合多民族国家オーストラリア（比較文化）
- ・ 憲法改正国民投票と王権の政治介入 ― 君主制か共和制か（憲法学・法学）
- ・ オーストラリアと自然～カンガルー、ボアブの木、エミュー他（動物学）
- ・ 最新オーストラリア事情（環太平洋外交、一部における新白豪主義の動き）（社会&国際時事）

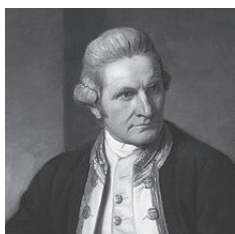
第3項 人物・用語の精査

社会は、時には強力なインパクトを残す人物を輩出する。それが歴史上の記録として今日に伝えられている。地域研究という学際的な学問を扱う授業ではどのような人物を紹介すればいいのか、これも事前に精査する必要があると考えた。合わせて、オーストラリアを地域研究にて学ぶ上で、押さえておくべき用語についても何であるかを考察した。その結果、以下の人物と用語をオーストラリア学における学ぶべき人物と用語であると判断した。

人物

- ・ James Cook（オーストラリア上陸 イギリスの領有宣言）
- ・ Abel Tasman（オーストラリアの一部とニュージーランド発見）
- ・ 1st Viscount Sydney (Thomas Townshend)（流刑実施を決定したイギリス内相）
- ・ Matthew Flinders（オーストラリアを広大な大陸であることを周回して確認）
- ・ Arthur Phillip（流刑入植地初代総督）
- ・ Peter Lalor（オーストラリア史上最大の武装蜂起のユーレカ砦事件）
- ・ Ned Kelly（ブッシュレンジャー）
- ・ Samuel Griffith（連邦憲法草案）
- ・ Edmond Barton（初代連邦首相）
- ・ Smith Kingsford（豪米太平洋無着陸飛行）
- ・ Henry Lawson（ブッシュ文学）
- ・ 野波小次郎（移民日本人潜水土士）

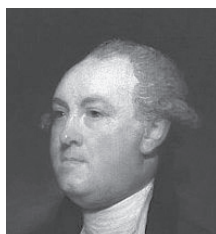
- ・ Eddie Mabo (先住民の占有権裁判)
- ・ Cathy Freeman (アボリジニアスリート)
- ・ Pauline Hanson (新白豪主義)
- ・ Queen Elizabeth II (オーストラリア国家元首)



Cook



Tasman



Sydney



Flinders



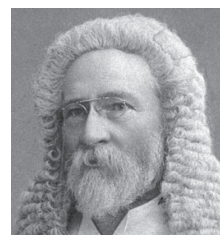
Phillip



Lalor



Kelly



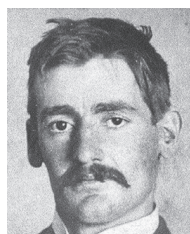
Griffith



Barton



Kingsford



Lawson



Nonami



Mabo



Freeman



Hanson



Elizabeth II

用語

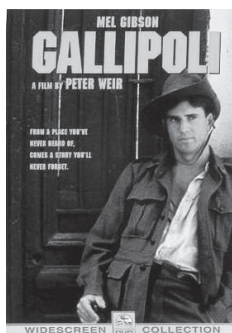
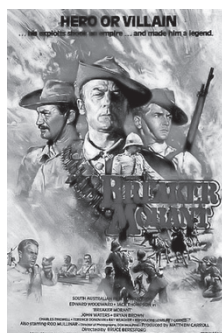
- ・ 先住民アボリジニー
- ・ アメリカ独立戦争
- ・ ロンドンの刑務所不足

- ・金星探索航海（未知の大陸探索） ・流刑入植 ・（当時の戦略物資）亜麻 ・総督
- ・エマンシピスト ・ブッシュレンジャー ・組織的移民 ・ゴールドラッシュ
- ・連邦設立 ・白豪主義 ・2つの世界大戦 ・Stolen children ・憲法改正国民投票
- ・文化多元主義 ・「カプチーノキッズ」 ・シドニーオリンピック2000 ・国旗国歌
- ・新白豪主義 ・オーストラリアの外交政策 ・Aussie English
- ・Emu, Kangaroo, and Koala ・Meat pie ・メイトシップ

第4項 映像の精査

オーストラリア映画は実話に基づいた作品が多い。これらを授業時に一部もしくは全部を活用することは、学生のより現地現場理解の一助となる。時間的制限から全てを扱うわけにはいかないが、以下のものが現段階における望まれるべく作品と筆者は判断している。

- [The Man from Snowy River]⁽²³⁾ オーストラリアのカントリーサイドを描く
[A Breaker Morant]⁽²⁴⁾ ボーア戦争を描く
[Gallipoli]⁽²⁵⁾ 1次世界大戦の ANZAC 軍の悲劇を描く
[Rabbit Proof Fence]⁽²⁶⁾ 盗まれた世代を描く。実体験者も登場



第5項 講義内容を精査する

トピック、人物、映像、キーワードなど多角的にオーストラリアを地域研究として教える場合の題材について見てきた。これらの題材を基に、全15回の講義内容をどのようにするかを精査することにより「地域研究オーストラリア」という授業が講義科目として成立に向かう。本項では、上記の題材からまとめた講義内容と、各講義における目標と問題提起、課題のあり方について考察していく。

オーストラリア関連の授業は1997年度に担当し、以降、授業評価も参考に講義内容を更新している。ここでは2020年度の「地域研究（オーストラリア事情）」⁽²⁷⁾の講義タイトルと内容を記す。

2020年度「地域研究（オーストラリア）」講義概要

- A その回の講義の内容と理解の目標到達点
- B 授業内で出した課題
- C 英文宿題 授業内配布資料等

第1講 地域研究オーストラリア概説

- A-1 オーストラリアの地理を確認する。6つの州、それぞれの州都、2つの準州について学ぶ。
- A-2 科目名の「地域研究」とはどのような学問でどのように学ぶのかを明らかにする。
- B この授業で学びたいことを書かせる。オセアニア地区への渡航経験の有無も聞く。
- C 英文教材を渡し、考古学、前史時代のオーストラリアに関する文献を課題とする。
課題教材 「How did people get here?」⁽²⁸⁾

第2講 先住民アボリジニー (1)

- A 前史時代、アボリジニー（含トーレス海峡先住民）のみ大陸に居た頃のオーストラリアを扱う。
文化人類学の視点から、親族関係、世界観、争う場合にはその原因、生活方法などを講義で扱う。ブーメラン、ディジュリドゥなど、生活道具を見せて学生にアボリジニーの生活道具に触れさせる。また、大陸全土に分布したアボリジニーの調査地図も見せてどのように大陸上陸後に全土に住居を広げていったかを説明する。
- B 講義を聞いて学んだこと、（有れば）質問をレポートとして書かせる。英文教材の内容を箇条書きにまとめさせる。
- C 課題教材 「Moving among the spirits」⁽²⁹⁾ 「People of the deserts」⁽³⁰⁾

第3講 イギリスのオーストラリア大陸入植

- A-1 スペイン、オランダ、イギリスが南太平洋の「未知の大陸」の発見を目指していた当時の世界情勢を説明する。イギリスがオーストラリア大陸を領有することになった背景を述べる。当時の航海航路図を示し、探検家がどのような接近を試みたか、それぞれの航海軌跡を紹介する。
- A-2 イギリスが占有した土地が、流刑囚を送りオーストラリアを開拓させるというイギリス政府の方針決定の背景と当時の政治状況を説明する。特にアメリカ独立戦争との関わりを詳しく述べて、当時の世界情勢を理解させる。
- B イギリスのオーストラリア入植動機を3つ挙げる。この中で何が第一動機であったかを各々が1つ選びそれを選んだ理由を書かせる。論理的な文章作成の練習とする。
- C 課題教材「Captain Cook did not discover Australia」⁽³¹⁾ 「Sydney Cove, 1788」⁽³²⁾
資料 「トーレス航海図」「タスマン航海図」「クック航海図」「当時の世界の植民地分布地図」

第4講 英領植民地1800年代前半

- A オーストラリアは大陸で広大な土地が確認されたのが1800年代に入ってからであることを説明する。流刑入植も年月が経つにつれ、刑期を終えた流刑囚がエマンシピストという社会クラスとして出現したことを理解させる。また各地域別に、植民地がどのように発展したかを述べる。その異なった開拓過程を理解させる。
- B 講義を聞いて学んだこと、(有れば) 質問をレポートとして書かせる。
- C 「God and New South Wales」⁽³³⁾ 「South Australia would be better」⁽³⁴⁾ 「Tasmanians at war」⁽³⁵⁾

第5講 日豪関係史 ― ブルームの盛衰

- A 日本とオーストラリアの交流を扱う。開国後、世界で最初に国が認めた海外労働渡航先はオーストラリアであったことを理解させる。オセアニア地域の漁業移民とアメリカ大陸の農業移民の違いについても説明する。筆者の現地訪問調査(ブルーム)の時の様子と現地事情を画像と共に紹介する。
- B 講義を聞いて学んだこと、(有れば) 質問をレポートとして書かせる。
- C 資料 「20世紀前半のオーストラリア北部海岸の真珠貝漁場分布図」

第6講 ゴールドラッシュ ユーレカ砦事件

- A-1 1850年代に公になったゴールドラッシュでオーストラリア社会が一変したことを述べる。
- A-2 人口急増で社会の歪みが生じ、オーストラリア史上最大の武装蜂起事件に至る背景を説明する。
- B 講義を聞いて学んだこと、(有れば) 質問をレポートとして書かせる。課題プリントの要点を箇条書きでまとめる。
- C 課題 「Gold fever」⁽³⁶⁾ 「Eureka Stockade」⁽³⁷⁾ 資料 「19世紀オーストラリア年表」

第7講 ブッシュレンジャー Ned Kelly

- A-1 オーストラリア植民地独自の[ブッシュレンジャリング]について説明する。それが起こった背景とそれが消滅した理由などを扱う。
- A-2 オーストラリアにおける歴史上の人物として最も人気があり知られている Ned Kelly について紹介する。その行動と後世に残したものは何だったかを示すことでオーストラリア史におけるケリーの位置づけを考える。
- B 課題教材の内容を箇条書きでまとめる。
- C 課題 「Ned Kelly Story」⁽³⁸⁾ 資料 「金鉱夫鑑札」

第8講 シドニーオリンピック2000

- A 2000年にシドニーで行われたオリンピックを映像を通して振り返る。開会式ではオーストラリアの文化を表すイベントして、本講で学んだジェームズ・クックやネッド・ケリー

なども登場する。そして最終聖火ランナーにアボリジニーのアスリートを充てた背景を考える。

B 映像を見ての感想、疑問点などを記す。

C 参考資料「Cathy Freeman」

第9講 ・ Federation ・ White Australian Policy

A-1 植民地（政府）に6分されていたオーストラリアが一つの連邦政府の下に統一に至る過程を講義する。なぜこの時期にその機運が高まったのか。統一に支障は無かったのか？ 20回以上書き換えられた連邦憲法草案など、どこをモデルに連邦政府（国）を作ろうとしたのかを考える。

A-2 連邦政府発足後、政府が取り組んだのが「白豪主義」であった。当時は白人が優秀かつ優先であるという考え方の基に政策が組まれていた。白豪主義の背景を説明する。

B 文献を読んで箇条書きでまとめる。

C 課題教材 「1900」⁽³⁹⁾ 「A White Australia」⁽⁴⁰⁾

第10講 18～19世紀 New Zealand

A イギリスの入植初期のニュージーランドについて考える。同じイギリスの植民地としてオーストラリアと何が同じで何が異なっていたのか？ 結果的に大きく異なった先住民の扱いについて考える。そして連邦政府準備会議に出席していたNZがなぜ離れていったかについても考える。

B ニュージーランドのマオリ戦争に関して各自で調べてレポートにて提出する。

C ニュージーランド全図。6つの州と位置関係を学ぶ。

第11講 先住民アボリジニー (2)

A-1 第2講の(1)では先史時代のアボリジニーを扱った。本講では白豪主義下の現代オーストラリアにおいてアボリジニーはどのような扱いを受けてきたのかを考える。

A-2 「テラヌリウス」を否定したマボ判決の衝撃と影響を話す。

A-3 「新白豪主義」⁽⁴¹⁾についてその動きと背景を説明する。

B アボリジニーに対する年代別3政策に関しての感想を書く。

C 資料「削除されたオーストラリア連邦憲法第127条（先住民は人口から除外する条項）」

第12講 Rabbit-Proof Fence

A オーストラリア映画を観る。前講で扱ったアボリジニー政策の中で「同化政策」を採っていた時代の物語である。実話に基づき本人も最後に登場する。[盗まれた世代]と言われ、強制的に親子を引き離された実態を考える。また白人側の思いの「私たちは良いことをしているのだ」という視点についても考えてみる。

B 映像を見ての感想をレポートに書く。

第13講 20世紀前半 — 2つの世界大戦とオーストラリア

A 第1次世界大戦でオーストラリアはニュージーランドとの連合軍を組み甚大な被害を被った。第2次世界大戦では本国イギリスが危機にさらされ、オーストラリアを守るのに頼りになるのはアメリカであった。従英から追米に転換するきっかけとなった世界大戦について考える。

B 課題文献を読み要旨をまとめる。

C 「War in the Pacific」⁽⁴²⁾ 「A House, A Holden and A Hills Hoist」⁽⁴³⁾

第14講 ・Cowra Breakout⁽⁴⁴⁾ ・多文化主義

A-1 第二次大戦中に収容された日本兵が起こした「カウラ事件」はオーストラリアの授業で取り上げられる事件である。対して日本人はこの事件を知らず、その温度差を埋める授業とする。

A-2 1970年代半ばより白豪主義から多文化主義に大転換したオーストラリア社会について扱う。多民族国家であり「カプチーノキッズ」と言われる多民族の混合社会について考える。

B 映像を見ての感想を記す。

C 参考番組 「初めて戦争を知った 第1回カウラ事件」⁽⁴⁵⁾

第15講 まとめ

A 全体のまとめを行うと共に筆者のオーストラリア経験を語る事を通してオーストラリアの日常生活を身近なものと感じられるものとして、留学が近づいている学生に渡航に向けての気持ちを盛り上げていく。

おわりに

本論文では、まず地域研究の接近（アプローチ）方法について考察し、オーストラリア研究における課題、研究にあたり留意する点などを明らかにした。オーストラリア学は、その歴史の浅さから今後既に固まった説をも変更になる可能性はあり、特に歴史学の分野では先住民と西洋移民との関係において多くの検証の余地があることを論じた。

続いて研究を通して得たものを、教育として外に向けて啓蒙活動及び研究事象としてのオーストラリア地域研究を具体的にどのように展開すればよいかについて、筆者の教育歴を通して固めてきたものを提示して、まだ数の少ないオセアニア地区の地域研究の高等教育レベルでのありかたを投げかけてみた。

今後、さらにオーストラリア及び周辺地域の学術的掘り下げと、更なる地域研究の学術分野と地域の教育内容が充実することを願って本稿を閉じたい。

註

- (1) 2020（令和2）年末現在、オンラインで授業名やシラバスを閲覧可能の高等教育部門の授業を閲覧したが、オーストラリア事情を扱っている科目名や内容はみつからなかった。
- (2) 田中忠治『新タイ事情(上)』1981 日中出版 10～11頁 田中は接近方法を「東南アジア研究にみられる接近方法」（p. 10）と述べているが、同じアプローチが、オーストラリア研究にも適応される内容を含んでいると筆者は考える。
- (3) その際の仮説は西洋社会を素材として構築されていることになる。
- (4) 田中 前掲書 11頁
- (5) 同上 12頁
- (6) ここで述べている「縦軸と横軸が織り交ぜながら進めていく」手法は、ニュージーランドの保育指針である【テ・ファリキ】において活用され具現化されている。
- (7) 筆者は入試問題で「世界史」を担当した際、高校の教科書を取り寄せた際、判明した。1999年時点のことである。
- (8) E. H. カー『歴史とは何か』1962 岩波新書 161～198頁「進歩としての歴史」
- (9) 当時は陸続きであった。しかし後に氷河期が終わり大量の水が溶けたことにより、ニューギニア島とオーストラリア大陸が「分断」され、よって新たな別人種や外敵が大陸にやって来ず、先住民は領土的な争いに巻き込まれることなく西洋文化来訪まで外敵と争うことなく過ごしてきた。
- (10) 領土を巡る争いが少ない一方、男女間の性的な関係を巡っての争いが多かったという。
- (11) 拙著「オーストラリアへの入植動機をめぐる歴史論争についての考察」『名古屋短期大学研究紀要第38号』内 2000年 1～16頁 参照。
- (12) 1952年に K. M. Dallas が発表した論文で、その後20年近く、この商業流刑説が大きな説得力を持つ説となった。*Tasmanian Historical Research Association Papers*, 1952, no. 3, p. 12を参照。論文タイトルは The first settlements in Australia: considered in relation to seapower in world politics である。
- (13) A. Frost. 'The choice of Botany Bay: the scheme to supply the East Indies with naval stores' in *Australian Economic History Review*, vol. 15. 1975, pp. 1-20.
- (14) G. Martin (Ed.) *The founding of Australia*, 1978. Hale & Iremonger は全33章に渡って主要3説に関する論文とその論点を時代の経過と共にまとめている。
- (15) D. Watson. *The Story of Australia—An Illustrated History for Young Australians*, 1984. Penguin Books, p. 37.
- (16) Ibid.
- (17) 'Prince Charles backed plot to oust beleaguered Australian PM Gough Whitlam in 1975, private letters reveal' in *Mail on line News*, 23 Oct. 2020, 22:49 配信) https://www.dailymail.co.uk/news/article-8873981/Prince-Charles-backed-plot-oust-beleaguered-Australian-PM-Gough-Whitlam-1975.html?ito=email_share_article-top
- (18) 1901年発布のオーストラリア連邦憲法127条には、「先住民をオーストラリア国の人口に加えない」と記されており、人間としてカウントされていなかった差別の証となっている。この条項は1967年まで存続した。
- (19) 1992年6月3日の連邦最高裁判所で「オーストラリア大陸は誰もいない空白の土地ではなかった」との判決が下された。
- (20) Terra nullius ラテン語で無主の地、誰のものでもない土地を意味する。国際法では、一般的に、誰も住んでいない地域、または住民が系統だった政府組織を発展させておらず、土地を改良し

耕作していない地域を指して用いられる。ニューサウスウェールズが白人により発見され植民が行われたとき、イギリス政府はその地域をテラ・ヌリウスであると考えていた。アボリジナルがヨーロッパ人の感覚での土地の所有を行っていなかったからである。その土地が（イギリス人の定義による）テラ・ヌリウスであるならば、その土地を発見し所有した最初のヨーロッパ人がその土地の所有権を得ると、イギリス人は信じていた。連邦最高裁判所は1992年、コモン・ロウに基づく土地の所有権が先住民にあることを認め、白人による植民が始まった頃のオーストラリアがテラ・ヌリウスだったという考え方を認めない判決を下したとされる。（「オーストラリア辞典」より）http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/bun45dict/dict-html/01155_terranullius.html（2020/1/2）

- (21) 科目名はその都度変更されているが、日本で知られていないオーストラリア事情、オーストラリア学、オーストラリア史を渡航予定の学生に教える、というのがその講義科目の役割であった。当初は通年30回の講義であったがやがて半期15回の授業として、筆者が所属する、桜花学園高等教育部門（名古屋短期大学・桜花学園大学）でオーストラリア関連の授業を担当してきた。
- (22) 筆者が『オーストラリア学』コースを専攻した修士課程コースでは、毎回それぞれの学問分野の専門家が講義を行い、合間にコーディネーターが全体をまとめていた。日本の大学の学士コースレベルにおいてはまず対象地域の一般教養を含めた知見の積み重ねが必要なレベルであると判断し、各回別の専門分野内容の講義を行うまでには実施していないし、まだそのレベルに達していないと判断した。
- (23) Banjo Paterson の作品をベースとした1982年作品。日本未公開。
- (24) 19世紀初頭の南アフリカのボーア戦争におけるオーストラリアの立ち位置を描く。1980年作品。日本未公開。
- (25) ANZAC とはオーストラリア・ニュージーランド連合軍の略称である。第1次大戦で多くの犠牲を出したガリボリの戦いを描く。1981年作品。邦題「誓い」。
- (26) 当時のオーストラリアの同化政策により強制的に親から引き剥がされたアボリジニーの姉妹を描く。2002年作品。邦題「裸足の1500マイル」。
- (27) 筆者の所属する保育学部国際教養こども学科2年生の必修科目。これは学科のカリキュラムがオーストラリアへの長期留学が設定されているので、渡航先のことを知る位置づけとなっている。なお「Oceanian Studies」として学芸学部の授業としても設定されており、選択科目として履修者がいる。
- (28) D. Watson. op. cit., pp. 6-7.
- (29) Ibid., pp. 20-21.
- (30) Ibid., pp. 24-25.
- (31) Ibid., pp. 28-29.
- (32) Ibid., pp. 32-33.
- (33) Ibid., pp. 58-59.
- (34) Ibid., pp. 78-79.
- (35) Ibid., pp. 80-81.
- (36) Ibid., pp. 83-84.
- (37) Ibid., pp. 88-89.
- (38) Ibid., pp. 108-109.
- (39) Ibid., p. 128.
- (40) Ibid., pp. 126-127.
- (41) ワン・ネイション党の創設者であるポーリン・ハンソンは1990年代後半、白豪主義撤廃後の

多文化主義政策を否定し、立党し、白人労働者層からの支持を受ける。反面「新白豪主義者」のレッテルを貼られ、行く先々で抗議行動を受ける。2010年代は、イスラム教徒排斥を議会演説で行う。

(42) D. Watson. op. cit., pp. 154-155.

(43) Ibid., pp. 164-165.

(44) 拙著「小史から探るオーストラリア地域研究」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第21号 93～104頁 参照。

(45) 1993年8月2日 NHK 第一テレビ放映。

(受理日 2021年1月7日)